JASE
現代性教育研究ジャーナル
MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2023年
No. 152
2023年11月15日（毎月15日）発行

日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 小澤洋美
© JASE. 2023 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

SEE性教育アカデミー 2023 in 仙台 報告①‥ 1
SEE性教育アカデミー 2023 in 仙台 報告②‥ 3
世界性の健康デー東京大会2023 報告 ‥‥‥ 9
わたしたちの性教育アクション⑧‥‥‥‥‥‥ 12
多様な性のゆくえ㊾‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 13
出会いは世界を広げていく⑧‥‥‥‥‥‥‥‥ 14
今月のブックガイド‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 15
JASEインフォメーション ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 16

◉ SEE 性教育アカデミー 2023 in 仙台 報告①

性問題行動のある人の SST
～当事者のニーズを偏見なく把握するために～

仙台市での体験型ワークショップ

9月3日（日曜日）に行われたSEE性教育アカデミーは、2023年3月25日（土曜日）、京都市の同志社大学今出川キャンパスでの体験型ワークショップ「性と対人関係に課題をもつ当事者の回復を支援するSST ～生きる力をつけるSSTワークショップ～」の続きである。仙台市の副都心が一望できる景観の中に、日本で2番目に大きいと言われる高さ100メートルの真っ白な観音像（仙台天道白衣大観音）が見えるエバーグリーンシティ・寺岡の13階パーティールームで開催された。

SEE（Sexuality Education & Empowerment）は、「関西性教育研修セミナー」として各種講演・海外スタディツアーを企画してきた10年の実績を活かし、より系統だった性教育の学びの場を提供していくことを目的として2018年に開講した。これまで概ね関西地区で年2回のペースでセミナーを開催してきた。東北地域での開催は今回が初めてである。

参加者と前田ケイ氏（右から3人目）と藤岡淳子氏（4人目）

今回のテーマは、「性問題行動のある人のSST ～当事者のニーズを偏見なく把握するために～」で、前回京都でのセミナーを踏まえてより具体的な内容になった。参加者は、地元宮城県近郊だけでなく北は北海道から西は島根県まで、またアメリカのマサチューセッツ州の大学からの参加者もあった。

講師は前回同様、前田ケイ氏（ルーテル学院大学名誉教授）、ファシリテーターは藤岡淳子氏（大阪大学大学院名誉教授）である。講師・スタッフを含めて19名が参加した。

ここで、前回（2023年5月号No.146）と重複するが、「SEE 性教育アカデミー」とSST（ソーシャルスキルトレーニング）について説明する。

「SEE 性教育アカデミー」では、From What to Learn to How to Learn（何を学ぶかから、どう学ぶかへ）をモットーに、受講者との対話を重視したプログラムを展開している。講義内容に関する質疑応答だけでなく、ディスカッションや「ふりかえり」の時間を十分にとり、講師と参加者が共に学ぶスタイルをとっている。

前回と同じ説明だが、SSTとは「当事者が支援者と一緒に考えながら、特定の対人状況の中で自分が取りたい行動の具体的な目標を決め、練習をして、必要な認知（考え方）と行動の能力を身に付けていく方法のこと」(前田ケイ著『保護司面接のためのSST』p.2, 日本更生保護協会)。主語は、「当事者」であり、支援者が〈やらなければ〉と気負うのではなく、当事者と〈一緒にやっていく〉ものである。支援が終結したあとも、当事者が自分の行動を考え、意思決定できるようになることが目指される。話し合うだけでなく、実際に練習をしてみるところがSSTの核心である。

講師である前田ケイ氏についても、経歴を簡単に紹介する。

現在、SST普及協会の認定講師および顧問、ルーテル学院大学名誉教授。ハワイ大学を経て、コロンビア大学大学院ソーシャルワーク修士課程を卒業後、1988年から東京大学附属病院精神神経科デイホスピタルにおいてSSTの日本への導入に尽力。その後、日本各地での精神科患者のリカバリーのためにSSTの普及にかかわり、更生保護や矯正教育分野でのSSTの実践および支援者の養成に当たっている。

SST及び今回のワークショップの具体的な内容については、SEEの共同代表である野坂祐子大阪大学大学院教授が、後半（3ページ以降）でレポートしているので精読していただきたい。

プログラムと体験者の声

大学の学生・研究者、学校の教員、病院や更生施設の臨床心理士やケースワーカーなど多様な職種の受講者に講師・スタッフを含め19名全員が、円座になって10時30分より「SST体験ワークショップ」が始まった。プログラムは、午前中「SSTを体験しよう（前田ケイ氏の講義と演習）」、「質疑・SST体験のわかちあい」、「交流会（歓談しながらランチタイム）」、その後、13時30分から15時まで「性問題行動のある人のSST」、休憩をはさんで15時15分から16時20分まで「参加者同士の対話」、16時20分から16時50分まで「わかちあい」と充実したワークショップであった。具体的な内容は、野坂祐子氏のレポートに譲って、ここでは、受講後の参加者の感想の一部を紹介する。

○皆さんとグループで当事者の方の思いについて学べて勉強になりました。

○先生たちと参加者同士は日本語がまだ上手じゃない私の世話をしてくださって本当に感謝しております。いろいろ勉強になりました。

○全体を通して前田ケイ先生のメタスキルを感じさせていただいたと今感じています。グループで何が大事なのかということを教えていただきました。現場で今日学んだことを挑戦していきます。

○SSTの技法だけでなく、支援者としての態度について本当に再度考えさせられ、とても貴重な体験をありがとうございました。

○SSTのロールプレイがわかちあいの時間で消化できた感じがしてよかったです。ロールプレイの進行役は参加者から希望者をつのっていただくのもよかったように思います。

○ケイ先生の言葉がどれも「はぁー」っと納得、感心するばかりでした。ただただ感じることのできた時間でした。

○SSTとは何か、前田ケイ先生の偉大さを知らずに野坂先生と藤岡先生を追っかけて京都から学びに来たのですが、参加してみて本当に学びがたくさんありました。普段教師として生徒と接する際にも生徒という当事者のニーズを把握してこようとしてきたのか問われたように痛感し、後ろ暗い気持ちになりました。私は対人援助学の学びの途中にいるのですが前田先生の当事者へのまなざし、関わり方をこの目で見ることができてとても幸せな気持ちになりました。SEEスタッフの皆様、素敵な企画をしていただき本当にありがとうございます。今後も学び続け行動していきます！

（文責　編集部）

◉ SEE 性教育アカデミー 2023 in 仙台　報告②

SSTを通した当事者の理解と支援者の姿勢

性問題行動へのよりよい対応に向けて

SEE 共同代表、大阪大学大学院教授　野坂 祐子

期待に満ちたスタート

ワークショップは、受講者や講師・スタッフが全員、お互いの顔が見えるように椅子で円座になってスタート。少し緊張した面持ちも見られたが、あちこちで笑顔があふれ、明るい雰囲気だった。全国各地から、それぞれの期待を胸に仙台の会場に集ってこられた様子がうかがえた。

本年３月に京都で開催したワークショップにも参加され、SST の有用性について手応えを感じただけでなく、講師の前田ケイ氏のおだやかであたたかいお人柄に惹かれた受講者も多くおられたようだ。前回に引き続き受講された方に加え、クチコミやご自身の業務上の必要性などから、初めて SEE 性教育アカデミーのプログラムに申し込まれた方もあり、「対話」基盤の学び合いのネットワークが広がりつつあるのが感じられた。

SEE 性教育アカデミーでは、包括的性教育の実践を広めるうえで、対象者の行動を変えようとするのではなく、支援者や教育者が自分の考えや感情に気づき、対話による関係性が築けるようになることを重視している。そのため、今回の仙台ワークショップでは、SST の基礎を学んでスキルの演習を行うとともに、参加したメンバー同士の交流（ランチタイム）や分かち合いの時間を設けることにした。

まずは、メンバーの自己紹介から。受講者は、児童精神科や精神病院、刑事施設や保護観察所、行政、民間の支援機関、学校、大学など、さまざまな現場で活動されており、専門性や立場も多様であった。SST

の対象範囲が、子どもから大人まで幅広いこと、さらに、今回の研修のテーマである「性問題行動」があらゆる領域で対応すべき課題であることを表していよう。日本の性教育について学ぶために海外から参加した受講者もおられ、交流が深まった。

参加動機の共有では、すでに SST を実務に取り入れ、取り組んだ当事者から「生活が楽になった」というフィードバックが得られたという報告もあった。多くは「SST（のようなもの）を活用している」ものの試行錯誤しながらであり、講師の指導を受けてよりよい実践につなげたいという目的が話された。

ソーシャルスキルトレーニングの基礎

午前中は「SST の基礎」として、定義や用語について学んだ。講義も一方的な説明ではなく、講師（前田ケイ氏）がメンバーの意見や質問を受けながら、その場ですぐに SST のさまざまな技法のデモンストレーションが始まるというインタラクティブなやり方であった。講師の実践例や SV（スーパーバイズ）[1]の経験から、発達障害の子どもや精神疾患のある成人、非行や犯罪によって施設に入所している人など、さまざ

まなニーズをかかえた人の事例が話され、とても臨場感のある講義だった。

改めてSSTの定義を確認すると、「当事者が支援者とチームを組んで、特定の対人場面における当事者本人の目標達成に役立つものの考え方（認知）と行動を、練習によって身につけていく方法のこと」である。SSTを説明するうえでの主語が「当事者」であることが重要である。確かに支援者が使う方法ではあるが、支援者のためにやるのではない。当事者が「これ（SST）は自分が使える方法だ」と実感し、「支援者と離れてからも、自分で『待てよ、もっといい方法はないかな』と自分が使える方法になったほうがずっとエンパワー（有力化）する」と強調された。講師が、当事者に語りかける「あなたが使える方法ですよ」という言葉は、本人を励ますだけでなく、行動の責任を本人に委ねるものだとも感じられた。

初めのうちは、当事者は「コーチ」のような支援者に教えてもらいながら練習していく。SSTで大事なのは、一般論を教えるのではなく、〈本人が、だれに対して、いつ、どこで、どういう結果を期待するのか？〉という目標を明確にしたうえで取り組むことである。ただ、「意見がはっきり言えるように」とか「衝動的な行動をとめるために」というのではなく、その人自身が特定の相手との〈関係性〉のなかで、具体的に自分が持ちたい考えやできるようになりたい行動（希望）に焦点を当てて練習していく。

目標は「いつか…」という長期目標、３か月程度の短期目標、今できる練習の目標（獲得目標）がある。目標があることで、どこまで達成できたかがわかる。そして、その目標達成に役立つ認知を身につけるために、行動の背景にあるものの考え方や解釈を見直す。例えば、暴力という行動をやめるためには、暴力の背景にある「バカにされた」という考え方を見直す必要がある。その際、グループでのSSTならば、メンバーからいろんなアイデアが出てくる。こうしたグループの力を活用するのが実践の鍵である。

また、行動は言葉で表現される言語的行動だけでなく、声のトーン、ボリューム、ピッチといった周辺言語的行動、さらに体全体で表される非言語的行動がある。たしかに、コミュニケーションの練習（SST）というと「どう言うか？」が頭に浮かぶが、視線や姿勢、態度といった非言語的表現によって、コミュニケーションに大きな説得力を持たせることができる。

SSTの方法とは、〈ある目標を達成するための順序だったやり方〉であり、方法のなかで使われるテクニックを技法という：例）サイコドラマで用いるロールプレイや役割交換などの諸技法など。練習では、主に次のようなトレーニングモデルがある。①行動リハーサル：例）忙しい相手を呼び止めて、話しかけるときに「ちょっと１分いいですか？」といったセリフを一緒に考えてからやってみる、②問題解決法：行動の選択肢を複数挙げて、特定の問題解決のための自分の認知レパートリーの幅を広げる：例）頼まれた仕事を「断るか、引き受けるか」の２択ではなく、「交渉する」などの別の選択肢を考える、③認知再構成法：違う考え方に置き換える：例）腹が立った場面で自分の考え方（自己会話）を見直し、怒りをコントロールする、④現実場面での支援付き練習（in vivo practice）：学んだことを実際の場で支援されながら、実行してみる方法もある。

「すごい！」当事者のニーズに沿う

講義のなかで次々と話されたエピソードのなかで、印象的だったものをふたつ紹介したい。

まず、周囲と話せない成人男性の事例。彼は話せないのではなく、本人としては「意味のある話しかしたくない」という。講師が〈意味のある話って？〉と尋ねると、人はなぜ生きるのか？ といった哲学的な話であることがわかった。話を聞いていた筆者としては、内心、「いやぁ、その話題は会話には向かないだろう……」と思っていた。そして、どうやって別の話題を探せばよいだろうかと考えていた。

ところが、講師は笑顔でこう続けられた。「すごいわよねぇ！」。本人にも「すごい！ とても大事な話ですね」と伝え、具体的には３つの椅子を並べ、話の順序として、まず、第一の椅子は、挨拶をし、第二の椅子は共通の話題、(「昨日のサッカー見た？ すごい試合だったよね」)、第三の椅子は「それにしても、人はなぜ、あんなに頑張れるのだろうか？ 人は何のために生きているんだろうね、という順序で会話は発展しませんか」と説明したところ、本人も納得。そして、挨拶をする SST を行い、実際の場で自分から話しかけたことで相手の笑顔を見た彼は、「会話って楽しいですね」と次のセッションで述べたという。

ここで講師が行ったのは、SST の定義にある〈当事者本人の目標達成に役立つ〉ことをめざした介入である。筆者が思い浮かべた「会話にふさわしい話題を考えさせたい」という考えは、彼のしたい話ではないのだ。当事者のニーズを理解し、その目標が達成できるように援助するのが SST である。目標達成をただ願うのではなく、具体的な方法と技法で練習をしていくのである。

また、「すぐに手が出てしまう」という子どもが、自傷行為をするようになったという。本人は、「人を殴るのはよくないから、自分を殴る」と言っている。周囲の大人としては、すぐに自傷行為をとめさせたくなってしまうものだが、このときも SST では子どもの考え方に注目する。そして、「相手を傷つけない」という考えを十分にほめることで、「自分はできる」という考え方ができるようになっていく。それによって、子どもは自分を殴るだけでなく、「自分をほめる」という行動もできるようになるかもしれない。「そのほかの考え方はないだろうか？」と選択肢を広げていく問題解決法を活用したエピソードである。

こうした取り組みは、とりわけグループで有効である。〈いい場〉が与えられていれば、自由に話すなかでさまざまな気づきが得られる。このように少し教えて、認知と行動に焦点をあてる介入は Teaching Therapy（ティーチングセラピー）とも呼ばれる。1990 年代から発展してきた認知行動療法は、こうした自傷行為、加害行為、ゲーム依存などの子どもにも役に立つ。

性問題行動やアディクションへの SST

会場で用意されたおいしいビュッフェのランチを楽しんだあとは、刑事施設で性犯罪をした男性の再発防止教育に携わっている方の進行で、ロールプレイを体験した。複数のタイプの性犯罪者のロール（役割）を演じるだけでも、いろいろ自分の内面の動きを感じたと報告する受講者もいた。

ロールプレイのあと、講師がいくつかの場面を取り上げ、介入技法が紹介された。例えば、ロールプレイ中のサポートは、役割演技の流れを損なわないように、「カーテン」と呼ばれる技法で「見えない設定」をし、対象者に「何が見える？ 今、何してる？ なんて言いたい？」などと教示し、状況を明確にして SST のターゲット行動を確認する。このカーテン技法は、支援者同士がその場でオープンに介入の方法を相談するためにも使われる。ロールプレイでは、話す練習をする前に、話す場面をつくるところから始めるなど、スモールステップで進めることも大切である。

また、メンバーがグループのなかで自己開示ができない場合のサポートとして用いられる「ダブル」の技法も紹介された。支援者が当事者の隣に座り、「もう一人のあなた（分身）になりますから」と説明する。「もし、あなたの考えと違ったら、そうは思わないって言ってくださいね」と伝え、本人が思っていても口に出せずにいるであろうことを言語化する。同じポーズをとって、隣に並ぶと、当事者は味方を得たような安心感がわき、心細さが軽減する。即興で、講師が受講者の「ダブル」になり、「これだけの人数がいたら、話しにくいよねぇ」とやりとりを展開させた。体験し

た受講者の喜びの声に、会場も大いに沸いた。

グループセラピーのロールプレイでは、支援者が一人のメンバーと話し込んでしまうことで、他のメンバーを置き去りにしてしまうことが起こりうる。メンバー全体で話題を共有し、「実は自分も…」と話せるようにすることが大切である。そのためには、グループサイズも重要であり、人数が多いときには小グループやペアなどのサブグループをつくるのもよい。また、室内にはSSTの手順を示すポスターを用意する。当事者のためだけでなく、支援者が慣れるまで必要となる。

今回のワークショップでは、性問題行動だけでなく、薬物使用のある人に関わる支援者も参加していたため、当事者が他者から再使用を誘われたときの対応についての質問があった。講師からは、本人にとって「これだけは譲れない」というものを探し、本人がもっとも言いたいことを言えるように練習するように、との助言があった。また、飲酒問題をかかえる人への対応について、本人が「誘いを断れなくて飲んでしまった」と言い訳をする場合、SSTで断る場面を取り上げるのが妥当かどうかの質問もあった。それに対して、「やる気がなければ、練習できない」というのが講師の回答であった。あくまでも当事者のニーズを理解するために、「生活のなかで、どういう人とつきあって、どういうふうにしたいのか？」などと聞いていく。日常生活でどういう人間関係があるのかを「コインマップ」[(2)]の技法を使って共有し、どんなことが起きているのか、どうしたいのかを話し合う。

性問題行動のある人には、性衝動の引き金にどう対処するかを話し合うこともある。まず、本人が衝動のきっかけを自覚していることを「気づいているのはすばらしいですね」と受けとめ、特定の場面を想定してロールプレイを行う。実際に演じてみるほうがイメージできるので、話し合うだけよりも効果がある。

ロールプレイに参加したメンバーの感想からは、役をとりながら「口では『やります』と言っても、内心はやりたくない気持ちもあるだろう」、「支援者役が一生懸命関わってくれているのは伝わるが、自分に向き合えずに思考停止してしまった」、「支援者との上下関係ではなく、対等な関係性が大切」、「メンバーで共通したパターンを探していけるとよいのではないか」などのコメントが出された。

ここで講師から、家族関係を扱う際の技法として「人間彫刻（ヒュウマン・スカラプチャー）」が紹介された。家族療法から生まれたもので、メンバーのポーズで家族関係を表現する手法である。これは家族造形法と呼ばれている。家族の立ち位置や心情をポーズで表し、３分間フリーズすると、役をとった人も見る人も、さまざまな感情がわく。家族によってニーズが異なるので、問題が発覚して間もない家族が、数年経って安定した他の人の家族像を見ることで、家族こそが回復へのリソース（資源）だと認識しやすくなる。

家族会でのエピソードをもうひとつ。「男なんて、最期に一言礼を口にするもの」と考えている夫から「一度もねぎらわれたことがない」と言う妻たちを前に、講師が「すぐにお礼を言われたい人は？」と尋ねたところ、全員が「はーい」と手を挙げた。それを見た夫たちはさっそくその晩から感謝の気持ちを伝えるための練習を始めた、というもの。家族のコミュニケーションを円滑にするために、当事者のニーズを明らかにしながら、ユーモアをもって扱う大切さを学んだ。

SSTを安全に行うコツとして、講師は「ほんの少しがんばればうまくいくという見通しがもてること」を挙げられた。人と話をするという作業でも、どういう場面を選び、どんなタイミングで話しかけるか、本人が話したい話題は何かなど、幅広く検討する。話しかけるには、コミュニケーションの「NO－GOサイン」を見極める必要があり、たくさんのステップがいる。当事者の力で何ができるかに合わせなければ、ロールプレイがたんなるお芝居になる危険性を指摘された。

性問題行動への介入

研修のまとめとして、もう一人の講師である藤岡淳子氏から「性の問題を扱うときに、どのようにSSTを活かせるか」という点から解説がなされた。性問題

行動への対応では、いろいろな扱い方があり、プログラムもさまざまである。中核的なモジュール（内容）と留意点として、次のことが挙げられた。

①サイクル図：性問題行動がどのように起きているかの循環を示したサイクル図を作成する。サイクルを止めるためのセルフマネジメントプランをきれいに作成することを目指してしまいがちだが、図や表の完成は副産物にすぎない。いかに、本人が性問題行動を防ぐ気になるかが重要である。②思考の誤り：犯罪行為を支える考え方。「触っても減るもんじゃなし（たいしたことではない）」といった考えを扱うのは必須であり、やりとりのなかでも常に注意を払う。③対人関係・コミュニケーション：このなかでSSTを入れることができる。④被害者の理解：被害者への影響について教える。ここで、被害者を想定してロールプレイを行う方法をとる人もいるが、慎重さが求められる。これらのモジュールを扱ったあと、改めてサイクル図を見直すと、「自分はどうやって性犯罪に至ったのか」がわかる。やめていく覚悟をきめて、そして再発防止のためのプランを立てていく。

藤岡氏によると、性犯罪をする人は、基本的には「人が好き」であり、人から認められたい、関わりたいという対人ニーズが高い人であるという。関わりたいから、女性に甘えようとする。本当は、対人関係をうまくやりたいという対人欲求が強い。サイクル図やコミュニケーションを扱うなかで、妻や上司とうまくいかないといった対人関係の問題が性犯罪につながるリスクになっていることに気づけるようになる。対人トラブルがあったときの状況を例に挙げてSSTを行い、自分の思いをきちんと伝えたり、交渉したりする練習をすることができる。

男尊女卑的な価値観がある人への対応では、それを正そうとするのではなく、「どこからそうした価値観を身につけたのか」を理解し、そうした考え方で他者との幸せな関係が築けているのかを話し合いながら、思考の誤りを修正していく。

また、性問題行動のある人は感情の扱いが苦手なことが多いので、感情を解きほぐすためには、メンバー同士の対話を重ねるサークルや治療共同体（Therapeutic Community：TC）が有用である。認知行動療法だけでなく、そうした関係性を基盤としたやり方が推奨された。講師はさらに、感情が苦手なのは「教える側も同じ」と指摘し、支援者もまた安全に感情体験ができる機会をもつことの重要性を強調された。

受講者からは、家庭内の性的虐待や性問題行動の開示に関する質問が出た。藤岡氏は、性的虐待について、加害者が「向こう（被害児）から誘ってきた」と責任転嫁しがちであり、多くが一定の社会性を有しているがこうした思考の誤りが顕著にみられると説明した。また、加害者が育った原家族の境界線がゆるく、とりわけ母親との密着した関係性があることも説明された。こうした家族の境界線侵害は、親子のどちらもそれを自覚できていないことがほとんどである。性的虐待の加害者は、被害児や家族をむしろ「大事にしている」つもりでいるが、「どうやって大事にしたらよいのか」わからないのだという。

また、性問題行動の開示については、対象が少年と成人では異なる面がある。少年の場合、ゆるやかなところから入って、自分がしたことの開示に至ることが多い。従来、成人に対しても、加害行為の内容に触れないようにする支援機関もあったが、最初から開示を扱うほうが治療教育のなかで何をしたらよいのかがわかってよい。そのためには、面接やグループにおいて守秘のルールをきちんと定めて、しっかり守ることが欠かせない。それがなければ、安全に話すことはできないと強調された。変化のためには、個人のなかだけで理解するよりも、他者とくにグループに対して話すほうが影響が大きく、変化につながりやすい。

まとめ：参加者同士の分かち合いから

最後に、藤岡氏の進行により、受講者全員で感想の分かち合いを行った。講師（前田ケイ氏）が講義のなかで紹介や実演をされたさまざまなSSTのスキルについて、「当事者のイメージを豊かにする」、「メンバ

ー同士が、そのイメージでつながることができる」などと感じた方もいた。また、性問題行動に対しては、支援者の側にも「何がでてくるかわからない」という恐れの気持ちがわき、対応において腰がひけてしまいやすいと感じていた方が、「自信をもってスキルを使っていきたい」と話された。さらに、これまでの支援者自身の対応について、「よかれと思ってやってきたことがまずかった」とふりかえり、これからも今回のようなロールプレイによる実践的な学習を続けていきたいといった意欲も語られた。ロールプレイに参加した方からは、「自分の気持ちが動いた、変化した瞬間を感じられた」として、業務で関わっている当事者の気持ちを想像できたという声もあった。

藤岡氏は、「前田先生の愛と人柄を感じた。相手のいいところを見つけるとか認めるとかではなく、心の中に平和がある」とコメントされ、前田氏の「スキルにとどまらない援助者としての姿勢」に敬意を払いつつ、「スキルというカードをたくさん持つことも大切」だとまとめられた。

「心の中に平和がある」という感覚は、受講者の多くも感じられたようである。そうした援助者としての姿勢は、前田氏が重視する Peaceful environment（平和的環境）にも表されている。受講者から「SST というより聴いてもらっている感じ」という感想もあったように、当事者へのリスペクトが援助の基本であることを再認識することができた。

本テーマの「当事者のニーズを偏見なく把握するために」は、スキルにとどまるものでなく、支援者が当事者の思いにしっかりと耳を傾け、（当事者だけでなく）支援者自身の思考の誤りを認識し、自分の感情をうまく伝えられるようになる必要がある。支援者同士が対話による関係性を構築していくことは、対人援助職や教育者にとって欠かせないことだといえよう。

この場を借りて、改めてご参加いただいた皆さまと講師のお二方にお礼申し上げる。余談だが、前田氏は今回の研修依頼について、息子さんから「どうしてこんな歳をとった人を講師に呼ばなきゃいけないの!? 日本の福祉が心配だよ」と言われたというエピソードを紹介された。92 歳を迎えられてなお、エネルギッシュに活躍されている前田氏が惜しみなく伝えてくださったたくさんの経験と智慧を大切にして、性教育や性の支援を広げていきたいという思いを新たにした。

【注】

(1) SV（スーパーバイズ）とは、これから取り組もうとする支援、または今取り組んでいる支援について、スーパーバイザーにアドバイス・指導をしてもらうこと。 所属機関内外の実務経験者や関連領域の専門家等がスーパーバイザーを務めることが多い。

(2) コインマップとは、当事者が、いま自分と関わりのある人たちとの関係をどう感じているか、その気持ちに従って一つひとつコインを置いていく方法。

ＪＡＳＥ性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約６万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

資料室利用方法

【閲覧予約】事前に電話で予約が必要〔11月27日（月）からtel 03-5801-6788〕。貸出業務は行っておりません。
【開室日・時間】月～金曜日しばらくの間 11: 00 ～ 17: 00
【休室日】土・日曜日、祝日、年末年始　※この他、会議等で臨時に休室することがあります。
【コピーサービス】コピー料金は用紙サイズにかかわらず１枚 10 円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。
https: //www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html

収集文献・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、セクソロジー、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集、ダイアモンド文庫、ほか。

→資料検索

https://opac.jp.net/Opac/search.htm?s=NS1JEYq24WsoCGy_N7GNQ_WQaeg

休室のお知らせ

移転のため、下記の期間を休室と致します。
移転先の詳細は16ページを参照。

【休室期間】
2023年10月23日(月)～12月1日(金)
【開室予定】
2023年12月4日(月) 11時～